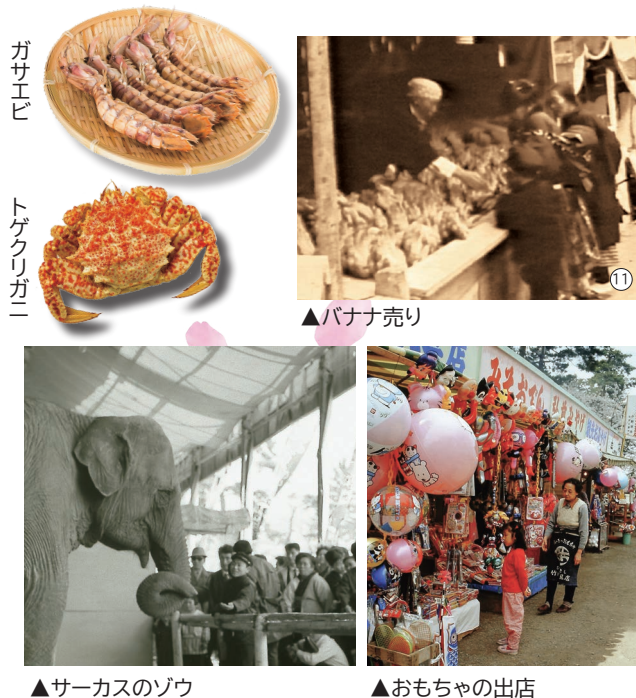


あこのころの
花見の楽しみ

さくらまつりと言えば出店。大正8年に、土手町のカネク野崎商店がまつりの出店でパンを売り出したところ大人気となり、その後も注文が増え続けたため、東京から職人を招いて本格的に売り出し、翌年には1日に食パンを1,000斤作るほど盛況であったという記録があります。また、近ごろはあまり目にすることもなくなりましたが、観桜会のごちそうと言えば、トゲクリガニとガサエビ（シャコ）とバナナでした。大正8年にはすでにバナナの屋台が出店していました。当時、バナナといえば高級品で、「（ハレの日である）観桜会でなければ食べられない」と言われたほどでした。観桜会ではおしゃれをして、バナナを食べるのが子どもたちの楽しみでした。

参考文献：「新編弘前市史」／掲載写真：⑪「桜と雪の地」【弘前図書館蔵】



▲サーカスのゾウ

▲おもちゃの出店



4代目 黒沼三千男さん

代々受け継ぐ
出店とともに



弘前公園での三忠食堂の出店

明治中ごろ、津軽そばの屋台から始まったという「三忠食堂」。さくらまつりでは大正時代の観桜会から店を出しています。現在、店主を務めるのは4代目の三千男さん。物心ついたころから、さくらまつりを見てきました。

「曾祖父の代から観桜会で出店をしています。2回目か3回目の観桜会にはすでに店を出していたと聞いています。子どものころは、まつりの時期になると、周りの友達が遊んでいるときに店の手伝いをしないといけないのが大変でした。でも、友達には『毎日弘前公園にいられてうやまいい』と言われたものです。実際、お客さんが少なくなる時間帯には、お小遣いをもらって、コイを釣りに行ったり、買い食いしたり、サーカスでゾウやライオンを見たりした楽しい思い出もあります。」

「私が子どものころは、お酒を飲んで騒ぐという

ことは、観桜会のときくらい。夜遅くまで観桜会で騒いで、羽目を外す大人が多かったです。子どもたちは、バナナを買ってもらって、そばを食べて帰ることが楽しみでした。今みたいに、物や食べ物が豊かな時代ではなかったの、さくらまつりは特別なものでした。」

「最近外国人のお客さんが多い印象を受けます。混んでいて長い時間並んでも、うちのそばを食べていってくれる常連のお客さんやさくらまつりに来るたびに店に寄ってくれる県外からのお客さんもいて、ありがたいです。」

今は5代目となる息子の卓也さんが店を手伝っています。

「代々受け継いできましたが、『続ける』ということは大変なことです。親心としては息子には無理しないで、できる範囲でやってほしいですね。」

桜を守る

ソメイヨシノの寿命は、60年だと言われています。弘前公園の桜は、明治時代に植えられたものが多く、昭和20年代に入ると徐々に衰え始めました。

昭和27年、実家がりんご農家だった弘前公園管理事務所（現在の公園緑地課）の職員が、衰えていく桜を見かね、りんごの栽培方法を参考に、不要な枝を切るせん定をしたり、樹の下に肥料を入れる施肥（せひ）をしたり、薬剤を散布したりするなど、さまざまな方法を試みました。「桜切る馬鹿、梅切らぬ馬鹿」ということわざがあったことから、当時は非難された管理方法でしたが、桜は年々よみがえり、今では「弘前方式」として、全国的にも手本とされる管理方法となりました。そして、それを受け継ぎ、現在も桜を守り続けるのが弘前公園のチーム桜守です。桜守の仕事について聞きました。



海老名 作業で難しいのはせん定ですね。橋場 数年後

の姿を予想しながら、切る枝を決めます。教科書通りにはいかないし、有名な木の枝を切るときは緊張します。

小林 毎年、市民が見る桜。形を変えずに毎年良い花を咲かせることが難しいです。せん定する理由を、現場の作業員だけでなく、見に来るお客さんにも説明できないといけません。以前、かなり腐っていたので、切らなくてはならなかった「最古のソメイヨシノ」の太い枝を切る時は悩みました。兄（前任の樹木医であった小林範士さん）が退任し、現場を指導する人がいない期間に、桜が弱ってしまっただけです。桜は手入れを怠ると、その後の4、5年は良い花が咲かなくなってしまう。

橋場 過去の作業の結果が桜の花に現れるので、さくらまつりの時は、きれいに咲いた花を楽しみながらも、次の手入れ方法を考えています。

小林 きちんと手入れをしている桜の寿命はないようなものです。

弘前の桜がこれほど豊かに咲くのは、1本1本の木に対して、たくさんの人と予算をかけて手入れをさせてもらえるからです。それにはやはり、市民の理解がなければいけないことなので、とてもありがたいと思います。

海老名 さくらまつりのとき、お客さんに「こんなにきれいに咲かせてくれてありがとう」と言われたことがあり、それがすごく励みになっています。

小林・橋場 私も言われたことがある！嬉しいですね。

海老名 桜守の仕事は、咲き始めから散るまで毎日桜を見ることが出来ます。体力的にはきつい時もありますが、幸せだと思います。

橋場 さくらまつり100回目ってすごいですよね。弘前の桜を見た子どもが、大人になってから桜を見て、そのときの光景を思い出すような、人の心に留まるような弘前の桜、ふるさとの桜を育てていきたいし、見てもらいたいと思っています。



公園緑地課 チーム桜守 橋場真紀子(左)、海老名雄次(中)、小林勝(右)

100回目のさくらまつりは 4月23日から5月6日まで開催します